

ビジュアル・リテラシーの重要性

— 1 ディスレクシア当事者の声

神山 忠

本章ではディスレクシアとは何かを押さえた上で、ディスレクシアなリテラシーを明らかにする。人は、感じ方、理解の仕方が多様であり、文字を文字として認識するのが苦手で、図として捉える人がある。通常、人は音読作業と解読作業を同時処理するが、ディスレクシアにはそれができない。語彙の獲得が聴覚信号、視覚記号、意味のイメージをセットにして貯め込んでなされる一方で、材料から完成品をたちどころにイメージできるなどのリテラシーを持つ。近年の、1 スライドにキーワードと関連図表の PPT 形式、マインドマップやフローチャートは役立つ。ディスレクシアの人も 100 年前なら読み書き障害者とは言われなかっただろうし、開発途上国では現在でも特性に合った健全なコミュニケーションや文化が存在している。「芸能、芸術、スポーツ、ものづくり」などは、ディスレクシアの得意分野である。多様なリテラシーを認めていくことが、多様な価値観をもたらし、多様なゴールのある社会につながる。本章の最後に、私の読字作戦を Q&A 形式で紹介する。

テクノロジーとリテラシーの多様性

— 1 ロービジョン当事者の声

森田 茂樹

人生半ばに難病の眼疾患を発症し、絶望から3年間のトンネル生活の後、「拡大読書器」と出逢い、読み書きをほぼ完全復活させる。この自身の体験から人生を一変させ、本来「ロービジョンケア」を受ける立場の患者から、たぶん、日本でただ一人のロービジョンケアを行う患者となる。以降、大学病院をはじめとする多くの病院・福祉施設でのロービジョンケア、日本各地での講演・個別相談を行う傍ら、大学・短大・専門学校で非常勤講師を務める。自身が患者であることを最大限活用し「患者から学ぶ」ことを最重要と考え実践して現在16年目を迎えている。拡大読書器をはじめとする視覚補助具の選び方・使い方など自身の知識のほとんどを実践の中から体得した。その視覚障害の当事者としての独自の視点から、医療・教育・福祉などに対しても厳しいポジションに立って発言している。

聴者の家庭に生まれた1ろう者の声

小野 広祐

聴者の家庭に生まれた私は、学校だけでなく家に帰っても口話訓練が待っていた。聞こえない子の親の約90%が聴者であることを考えたら同じ境遇のろう児は多かっただろう。

音楽家である父から小学部を卒業するまで毎週特訓を受けてきた私は、発音、発声ともに自信があったが、高等部に入り自分の発音が通じないと知る。結局聴者並みに話せるようにはならなかった。自分は聴者と比べて劣っていると思い込んでいた。

そんなとき、ろう者を「言語的少数者」と捉えた木村・市田の「ろう文化宣言」(1995年)に出会い、“ろう者として生きる”決意をした。

長い葛藤の時期があったが、今では母が手話で話しかけてくれる。聴者と結婚して生まれた息子も聴者であるが、家庭内言語は日本手話である。現在の仕事は手話で私立ろう学校の明晴学園の教員と、NHK手話ニュースキャスターで、ともに日本手話で仕事をしている。生まれ変わってもろう者になりたいと思っている。

デフファミリーに生まれた1ろう者の声

川島 清

私はろう家族に生まれ、自分が特別であるという認識はなかった。しかし、ろう学校に入ると、厳しい口話教育を受け、それが学校外では通じない経験をもった。母親の友人の姿からろう者の置かれている厳しい現実を知った。ろう者が手話で語っていると周りが冷ややかに見る時代だった。大人の会話からろう者の現実を知ると同時に、手話が自然と身についた。そこで身についた手話を寄宿舎の友達に使ったが、聴者を親に持つ、多くの友達には通じなかった。

現在は聴者が手話を学ぶような時代になったが、聴者の手話は異なる。しかし、ろう者の手話で、「てにをは」がないから通じなかったこと、「語彙数が少ない」ために気持ちや思いを話すのに戸惑うことなど、まったくなかった。これは聴者が手話を知らないということであり、手話が日本語より劣っていることではない。私の中でも、一つの言語として手話は認知された。自分たちの母語をきちんと身につけることで、私たちは私たちらしく生きられる。

ろう者がろう者に聞く

— ろう学校でリテラシーは育成されたか

中山 慎一郎

筆者は先天性のろう者で、第一言語は日本手話、第二言語は書記日本語のバイリンガルである。友人の大半は、筆者と同じろう者であり、仕事や私事など日頃、メールやファックスなどでやりとりをしている。その彼らが書く書記日本語は、ごく一部の者を除き、個人差はあるものの、残念ながら完全というには程遠いものである。

その友人のろう者達の出身校であるろう学校では、その書記日本語をどのように教育していったのであろうか。本章では、これまでのほとんどの論文に共通のろう教育を担う聴者側からの視点ではなく、教育を受けた側の当事者である、ろう者本人の視点を重視し、ろう者本人は自分自身が受けてきたろう教育をどのように受け止めているかを、ろう者二人に対するインタビューを通して探る。

当事者と非当事者

齊藤 道雄

2001 年以降、障害の当事者のあいだで当事者研究という試みが進んでいる。北海道の精神障害者グループ「べてるの家」ではじまった当事者研究は、その後全国に広がり、身体障害や発達障害など他の分野にも波及する大きな流れとなった。当事者研究は当事者が自身の抱える障害や病気、その症状や困難を自分自身の感覚と知覚、経験にもとづいて捉えなおし、自分に何が起きているのか、どうすればいいかを考える。本人が中心となり、おなじ障害や病気、困難をもつ仲間が参加し議論することで、当事者だからこそ気づき、言語化し、提示できるさまざまな経験と知恵を共有してきた。当事者研究が生みだした知の体系は、非当事者が知りえなかった多くのことを明らかにし、従来の学問知を相対化するとともに、人間存在についての哲学的な洞察を深めている。また当事者と非当事者の関係について、さらには私たちの意識と社会のあり方についての再検討を促している。

ろう児に対する教育政策

障害児教育かマイノリティ言語教育か

岡 典栄

日本におけるろう教育は聴覚障害児に対する特別支援教育の一環として、他の障害を持つ子どもに対するものと同様に行われている。つまり、音声が聞き取れない子どもたちは、聴力に「障害」がある「障害児」として、視覚障害児や肢体不自由児、発達障害児等とともに、その教育上、特別な支援が必要だと判断されている。

ろう児が成長した存在であるろう者を、木村・市田(1995)が「ろう文化宣言」において「言語的少数者」と定義し、「障害者」という病理的視点から「言語的少数者」という社会的文化的視点へと転換を試みた後でも、ろう児に対する教育が特別支援教育の枠組みの中で行われていることに違いはない。本章では、ろう教育が特別支援教育の中で行われている現状を特に予算面から概観したうえで、ろう児に対する教育がどうあるべきかを改めて考察する。

情報のユニバーサルデザイン

あべ やすし

本章では、「情報をすべての人にとどける」ことと、「だれもが意見や情報を発信することができるようにする」ことを「情報のユニバーサルデザイン」と定義し、それを実現するためになにが必要なのかを整理する。そして、実践例として「図書館利用に障害のある人々へのサービス」に注目する。

情報のユニバーサルデザインとは、情報のかたちをその人にあわせる仕組みをつくるということだ。そのためには臨機応変に対応できる仕組みが必要である。そこで、情報機器を利用したり、情報支援を提供したりすることが要求される。また、情報を構造化し、状況や全体像を把握し見通しをたてることができるようにすること、表記に注意しながら、わかりやすく表現することが重要である。だが、どのような情報を必要としているのかを把握し、とどけることが必要である。また、だれもが情報を発信することができるように、支援していく必要がある。

マイノリティと多様なリテラシー

佐々木 倫子

本章では「多様なリテラシー」とは何かを、まず、読み書き能力を意味する伝統的リテラシーと、読み解く能力・活用能力を意味する拡張的リテラシーの点から考える。さらに、マイノリティ言語話者の場合必至の複数言語のリテラシーを採りあげ、次に、変革的マルチリテラシーズ教育学からの意味を加える。その上で、「マルチリテラシーズ」の実際として、視覚障害者と聴覚障害者のリテラシーの一端を採りあげる。次に、マイノリティのもっとも明らかなケースとして、聴覚障害児のリテラシーの育成を採りあげ、その実際と順調な育成に必要な条件は何かを整理する。現代の授業におけるマルチメディアの果たす役割と言語能力を把握することの重要性を指摘した上で、授業設計の実例を紹介する。最後に、マイノリティのリテラシー育成にあたって多様性を尊重する教育と社会のあり方を考えることの重要性に触れる。